

映像メディア表現の研究 ～美術科教育法及び図画工作教育法 における指導～

Research on Visual media expression: Teaching in the Art education method and the Arts and Crafts education method.

市川 治郎
ICHIKAWA Jiro

キーワード：映像メディア表現、美術科教育法、図画工作科教育法

Keywords：Visual media expression, the Art education method, the Arts and Crafts education method,

In recent years, due to the rapid progress of smartphones and cameras, even compact digital cameras do not seem to be necessary as a means for taking daily snapshots and photographs published on the Internet. Even when trying to take high-definition photographs, the performance of digital single-lens reflex cameras and mirrorless single-lens reflex cameras is remarkably improved, and the scene where single-lens reflex film cameras are used as before is disappearing.

Although it has been a history that our lives will become even more convenient due to technological advances, the intuitive operability and depth of taste that a film camera possesses has irresistible appeal.

In this research, we focused on the most characteristic operation of the film camera, “loading the film”, and recorded how to handle the functions that are already being lost. I would like to consider media expression.

1. はじめに

近年、スマートフォン・カメラの急激な進歩のため、日常のスナップ写真やネット上に公開する写真を撮影する手段としては、コンパクト・デジタルカメラでさえ必要性を感じないような状況になってきた。また、特に高精細な写真を撮影しようとする場合であっても、デジタル一眼レフカメラやミラーレス一眼レフカメラの性能向上が著しく、かつてのように一眼レフ・フィルムカメラを使用するような場面はなくなりつつある。

技術の進歩により我々の生活が一段と便利になることは歴史の流れであるが、フィルムカメラのもつ道具としての直感的な操作性や味わいの深さには捨てがたい魅力もある。

この研究では、フィルムカメラの最も特徴的な操作である「フィルムの装填」に焦点を当て、すでに失われつつある機能の扱い方を記録することを通して、美術科教育法や図画工作教育法における映像メディア表現との関連について考察したい。

2. 研究の目的

平成 28 年 12 月の中央教育審議会答申では、小学校図画工作科、中学校美術科及び高等学校芸術科（美術、工芸）における成果と課題について、次のように指摘された。

○図画工作科、美術科、芸術科（美術、工芸）においては、創造することの楽しさを感じるとともに、思考・判断し表現するなどの造形的な創造活動の基礎的な能力を育てること、生活の中の造形や美術の働き、美術文化に関心を持って、生涯にわたり主体的に関わっていく態度を育むこと等に重点を置いて、その充実を図ってきたところである。

○一方で、感性や想像力等を豊かに働かせて、思考・判断し、表現したり鑑賞したりするなどの資質・能力を相互に関連させながら育成することや、生活を美しく豊かにする造形や美術の働き、美術文化についての実感的な理解を深め、生活や社会と豊かに関わる態度を育成すること等については、更なる充実が求められるところである。

つまり現在の学校教育では、二つめの○印に示されたことが不十分であり、改善しなければならないという意味である。すなわち、「感性や想像力等を豊かに働かせ」、「鑑賞したりする」、「資質・能力を相互に関連させながら育成すること」、「生活を美しく豊かにする造形」、「美術文化についての実感的な理解を深め」、「生活や社会と豊かに関わる態度」などを充実させなければならないという趣旨が示されたものと解釈できる。

私はこれらの文言の中で、とりわけ「実感的な理解を深め」という部分に重要性を感じる。

日常生活でも「知っていることとできることは違う」とはよく言われることであるが、例えば、フィルムカメラの使用方法をマニュアルを読んで知識として知っていたとしても、実際にフィルムを装填しようとした時、その材質感や各部への取り付け方を体感しなければ、正しく操作することにはつながらないということに似ていないだろうか。

そこで、すでに将来性や発展性には乏しい素材ではあるが、フィルムカメラを使用する映像メディア表現の基本として、カメラへのフィルム装填という活動に着目して研究を行うこととした。

3. 小学校図画工作、中学校美術、高等学校芸術（美術・工芸）における映像メディア表現の扱い

文部科学省による小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 図画工作編では、コンピュータ、カメラなどの情報機器の利用については、『(10) コンピュータ、カメラなどの情報機器を利用することについては、表現や鑑賞の活動

で使う用具の一つとして扱うとともに、必要性を十分に検討して利用すること。』としている。

また、中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 美術編では、『美術の表現の可能性を広げるために、写真・ビデオ・コンピュータ等の映像メディアの積極的な活用を図るようにすること。』として、『映像メディアの活用』を示し、『映像メディアによる表現は、今後も大きな発展性を秘めている。デジタル機器の普及などにより、映像メディアの活用は従前に比べると図りやすくなってきているといえる。これらを活用することは表現の幅を広げ、様々な表現の可能性を引き出すために重要である。また映像メディアは、アイデアを練ったり編集したりするなど、発想や構想の場面でも効果的に活用できるものである。次のような特徴を生かし、積極的な活用を図るようにすることが大切である。』としている。

さらに、高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説 芸術編（美術、工芸）では、『(3) 映像メディア表現』として、『映像メディア表現に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 映像メディアの特性を踏まえた発想や構想

- (ア) 感じ取ったことや考えたこと、目的や機能などを基に、映像メディアの特性を生かして主題を生成すること。
- (イ) 色光や視点、動きなどの映像表現の視覚的な要素の働きについて考え、創造的な表現の構想を練ること。

イ 発想や構想をしたことを基に、創造的に表す技能

- (ア) 意図に応じて映像メディア機器等の用具の特性を生かすこと。
- (イ) 表現方法を創意工夫し、表現の意図を効果的に表すこと。』としており、発達の段階に応じた指導の高度化が求められていることが分かる。

4. 映像メディア表現におけるフィルムカメラの取扱い

2020 年時点においても、レンズ付きフィルムのように、フィルム交換の必要がない簡易カメラの需要はあるようだが、かつて全盛を誇った一眼レフ・フィルムカメラは生産終了となつてかなりの時が経った。現在でも一部のメーカーが特殊な需要のためにフィルムカメラを生産し続けているが、肝心のフィルム自体の生産終了も危惧されるような時代になった。そのような時代に敢えてフィルムカメラの使用方法を研究する必要があるのだろうかという疑問も生じるところである。

私がこの課題を取り上げたのは、現在のスマートフォンカメラやコンパクト・デジタルカメラのように、ボタンに触れるだけで自動的に写真が撮影されてしまうような自動機械ではなく、人間があれこれと手加減しながら扱う必要のあった旧式の機械の操作に、「実感的な理解を深める」ためのきっかけがあるのではないかと考えたからである。

マッチを擦って点火できない若い理科教員の問題は取り上げられて久しいが、今更ながらの感もある「フィルムの装填方法」に着目し、失われつつある手動式の操作を記録してみたい。



1 ニコマト FT 2 型（1976 年製造）



2 右側のスプール（巻き取り軸）にフィルムを差し込み、パーフォレーションが上下の爪にしっかりかかっていること、及びガイドレールから外れていないことを確認する。左上面のフィルム巻き戻しレバーを回転させてフィルムのたるみをなくす。



3 裏蓋を開め、右上面のフィルム巻き上げレバーを動かした時、左上面にあるフィルム巻き戻しレバーが回転することを確認する。



4 ライカ M 5 型 (1972 年製造)



7 ニコン S 型 (1954 年製造)



5 底面のカバーを外し、背面の蓋を開く。



8 スプロケットの上下の爪にフィルムのパーフォレーションがはまっていることを確認する。



6 フィルムがしっかりスプロケットのスリットに差し込まれ、フィルムガイドレールから外れていないことを確認する。



9 下方から上方へカバーを差し込むようにして閉める。



10 ライカスタンダード型（1939 年製造）



11 底蓋に図示されたようにフィルムの先端部分（ベロ）を切り取って加工する。



12 フィルム巻き取り用軸にフィルム先端を差し込む。

5. まとめ

フィルムの装填方法として、完全な機械式シャッター時代のカメラ4台について、古い時代のものに遡って示した。

新しいものより古いものの方が、一つ一つの操作に慎重を要し、機械的な完成度の低さから、ある種のコツや慣れを必要とする。特にフィルムのパーフォレーションが爪からずれていたり、巻き取り軸のスリットから外れて巻き取られていなかったりという失敗が多く発生しやすい。最悪の場合は撮影したつもりフィルムが全く未撮影の状態で見像されたり、カメラ内部で巻き戻したつもりフィルムがそのままの状態で見像されたりなど、感光してしまったりなどの失敗もあった。フィルムによる撮影では、フィルムの扱いの失敗はやり直しが効かない。また、規定枚数を撮影仕切るまでは、撮影が成功しているのか失敗しているのかも分からない。それを良い緊張感と捉えるか不自由さ不便さと捉えるかが、フィルムカメラの価値を左右する。

改めて、時代の進行と共に機械が人間にとって使いやすく便利になる反面、使いにくかった道具を使いこなそうとして知らず知らずに鍛えられていた私たちの手先の巧緻性は退化し、いつの間にか能力のほとんどをAIに取って代わられてしまったのではないかと不安に駆られた。

それが杞憂であればいいが、小学校図画工作、中学校美術、高等学校芸術美術工芸における子どもたちの（教員についても）授業での様子を思い浮かべるにつけ、今後はさらに意図的に「実感的な理解を深める」ような仕組みを取り入れる必要があるのではないかと感じた。

6. 参考文献

- (1) 文部科学省：小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 図画工作編、p.180、文部科学省、2017.
- (2) 文部科学省：中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 美術編、p.179、文部科学省、2017.
- (3) 文部科学省：高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説 芸術（美術、工芸）編、p.466、文部科学省、2018.